

外科室

泉鏡花作

上

實は好奇心の故に、然れども予は予が畫師たるを利器として、兎も角も口實を設けつゝ、予と兄弟もたゞならざる醫學士の高峰を強ひて、其の日東京府下の病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを餘儀なくしたり。

其日午前九時過ぐる頃家を出で、病院に腕車を飛ばしつ。直ちに外科室の方に赴く時、先方より戸を排してすら／＼と出来る華族の小間使とも見ゆる容目妍き婦人二三人と、廊下の半ばに行違へり。

見れば渠等の間には、被布着たる一個七八歳の娘を擁しつ、見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄闌より外科室、外科室より二階なる病室に通ふあひだの長き廊下には、フロツクコート着たる紳士、制服着けたる武官、或は羽織袴の扮装の人物、

其他、貴夫人令嬢等いづれも尋常ならず氣高きが、
彼方に行違ひ、此方に落合ひ、或は歩し、或は停し、
往復恰も織るが如し。予は今門前に於て見たる數臺
の馬車に思ひ合せて、密かに心に領けり。渠等の或
者は沈痛に、或者は憂慮しげに、はた或者は慌しげ
に、いづれも顔色穩ならで、忙しげなる小刻の靴の
音、草履の響、一種寂寞たる病院の高き天井と、廣
き建具と、長き廊下との間にて、異様の跽音を響か
しつゝ、轉た陰惨の趣をなせり。
予はしばらくして外科室に入りぬ。

時に予と相目して、身邊に微笑を浮べたる醫學士
は、兩手を組みて良あをむけに椅子に凭れり。今に
はじめぬことながら、殆ど我國の上流社會全體の喜
憂に關すべき、この大なる責任を荷へる身の、恰も
晚餐の筵に望みたる如く、平然として冷かなること、
恐らく渠の如きは稀なるべし。助手三人と、立會の
醫博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護
婦其者にして、胸に勳章帯びたるも見受けたるが、
あるやんごとなきあたりより特に下し給へるもあり
ぞと思はる。他に女性とてはあらざりし。なにがし

公と、なにがし侯と、なにがし伯と、皆立會の親族
なり。然して一種形容すべからざる面色にて、愁然
として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々に膽られ、室外の彼の方々に憂慮
はれて、塵をも數ふいべく、明るくして、しかも何
となく凄まじく侵すべからざる如き觀ある處の外科
室の中央に据ゑられたる、手術臺なる伯爵夫人は、
純潔なる白衣を絡ひて、死骸の如く横はれる、顔の
色飽くまで白く、鼻高く、頤細りて手足は綾羅にだ
も堪へざるべし。唇の色少しく褪せたるに、玉の如
き前齒幽かに見え、眼は固く閉したるが、眉は思ひ
なしに顰みて見られつ。縵に束ねたる頭髮は、ふさ
／＼と枕に亂れて、臺の上にこぼれたり。

其かよわけに、且つ氣高く、清く、貴く、美はし
き病者の倂を一目見るより、予は慄然として寒さを
感じぬ。

皆學士はと、不圖見れば、渠は露ほどの感情をも
動かし居らざるものゝ如く、虚心に平然たる状露れ

て、椅子に坐りたるは室内に唯渠のみなり。其太く
落着きたる、これを頼母しと謂はゞ謂へ、伯爵夫人
の爾き容體を見たる予が眼よりは寧ろ心憎きばかり
なりしなり。

折からしとやかに戸を排して、靜にこゝに入來れ
るは、先刻に廊下にて行逢ひたりし三人の腰元の中
に、一際目立ちし婦人なり。

そと貴船伯に打向ひて、沈みたる音調以て、

「御前、姫様はやう／＼お泣き止み遊ばして、別
室に大人しう在らつしやいます。」

伯はものいはで頷けり。

看護婦は吾が醫學士の前に進みて、

「それでは、貴下。」

「宜しい。」

と一言答へたる醫學士の聲は、此時少しく震を帶
びてぞ予が耳には達したる。其顔色は如何にしけむ、
俄に少しく變りたり。

さては如何なる醫學士も、驚破といふ場合に望み

ては、さすがに懸念のなからむやと、予は同情を表したりき。

看護婦は醫學士の旨を領した後、彼の腰元に立向ひて、

「もう、何ですから、彼のことを、一寸、貴下から。」

腰元は其意を得て、手術臺に擦寄りつ。優に膝の邊まで両手を下げて、しとやかに立禮し、

「夫人、唯今、お薬を差上げます。何うぞ其を、お聞き遊ばして、いろはでも、數字でも、お算へ遊ばしますやうに。」

伯爵夫人は答なし。

腰元は恐るゝ繰返して、

「お聞濟でございませうか。」

「あゝ。」

とばかり答へ給ふ。

念を推して、

「それでは宜しうございますね。」

「何かい、麻酔劑をかい。」

「唯、手術の濟みますまで、ちよつとの間でござ
います。御寝なりません、不可ませんさうで
す。」

夫人は黙して考へたるが、

「いや、よさうよ。」と謂へる聲は判然として
聞えたり。一同顔を見合せぬ。

腰元は諭すが如く、

「それでは夫人、御療治が出来ません。」

「はあ、出来なくツても可いよ。」

腰元は言葉は無く、顧みて伯爵の色いを伺へり。

伯爵は前に進み、

「奥、そんな無理を謂つては不可ません。出来な
くツても可いといふことがあるものか。我儘を謂つ
てはなりません。」

侯爵はまた傍より口を挟めり。

「餘り、無理をお謂やつたら、姫を連れて来て見
せるが可いの。疾く快くならんで何うするものか。」

「はい。」

「それでは御得心でございますか。」

腰元は其間に周旋せり。夫人は重げなる頭を掉り

ぬ。看護婦の一人は優しき聲にて、

「何故、其様にお嫌ひ遊ばすの、ちつとも厭なも
んぢやございませんよ、うと／＼遊ばすと、直ぐ濟
んでしまひます。」

此時夫人の眉は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪
へざる如くなりし。半ば目を閉きて、

「そんなに強ひるなら仕方がない。私はね、心に
一つ秘密がある。麻酔劑は謔言を謂ふと申すから、
それが恐くつてなりません、何卒もう、眠らずにお
療治が出来ないやうなら、もう／＼快らんでも可い、
よして下さい。」

聞くが如くんば、伯爵夫人は、意中の秘密を夢現
の間に人に咳かむことを恐れて、死を以てこれを守
らうとするなり。良人たる者がこれを聞ける胸中い
かん。此言をしてもし平生にあらしめば必ず一條の
紛紜を惹起すに相違なきも、病者に對して看護の地
位に立てる者は何等のことも之を不問に歸せざるべ
からず。然も吾が口よりして、あからさまに秘密あ
りて人に聞かしむることを得ずと、斷乎として謂出

せる、夫人の胸中を推すれば。

伯爵は温乎として、

「私にも、聞かされぬことなにか。え、奥。」

「はい、誰にも聞かすことはありません。」

夫人は決然たるものありき。

「何も麻醉劑を嗅いだからつて、謔言を謂ふとい

ふ、極つたことも無さうぢやの。」

「否、このくらゐ思つて居れば、吃と謂ひますに

違ひありません。」

「そんな、また、無理を謂ふ。」

「もう、御免下さいまし。」

投棄るが如く恚謂ひつゝ、伯爵夫人は寢返りして、

横に背かむとしたりしが、病める身のまゝならで、

齒を鳴らす音聞えたり。

ために顔の色の動かざる者は、唯彼の醫學士一人

あるのみ。渠は先刻に如何にしけむ、一度其平生を

失せしが、今やまた白岩となりたり。

侯爵は澁面造りて、

「貴船、こりや何でも姫を連れて來て、見せるこ

とぢやの、なんぼでも兒の可愛さには我折れよう」

伯爵は頷きて、

「これ、綾。」

「は。」と腰元は振返る。

「何を、姫を連れて来い。」

夫人は堪らず遮りて、

「綾、連れて来んでも可い。何故、眠らなけりや、

療治は出来ないか。」

看護婦は窮したる微笑を含みて、

「お胸を少し切りますので、お動き遊ばしちやあ、

危険でございます。」

「なに、私や、ぢつとして居る。動きやあしない

から、切つておくれ。」

予は其餘りの無邪氣さに、覺えず森寒を禁じ得ざりき。恐らく今日の切開術は、眼を開きてこれを見るものあらじとぞ思へるをや。

看護婦はまた謂へり。

「それは夫人、いくら何んでも些少はお痛み遊ばしませうから、爪をお取り遊ばすとは違ひますよ。」

夫人はこゝに於てばつちりと眼を二けり。氣もたしかになりけむ、聲は涼として、

「刀を取る先生は、高峰様だらうね！」

「はい、外科長です。いくら高峰様でも痛くなくお切り申すことは出来ません。」

「可いよ、痛かあないよ。」

「夫人、貴下の御病氣は其様な手輕いではありません。肉を殺いで、骨を削るのです。ちつとの間御辛抱なさい。」

臨檢の醫博士はいまはじめて恚謂へり。これ到底閑雲長にあらざるよりは、堪へ得べきことにあらず。然るに夫人は驚く色なし。

「其事は存じて居ります。でもちつともかまひません。」

「あんまり大病なんで、何うかしをつたと思はれる。」

と伯爵は愁然たり。侯爵は傍より、

「兎も角、今日はまあ見合すとしたら何うぢやの。後でゆつくりと謂聞かすが可からう。」

伯爵は一議もなく、衆皆これに同ずるを見て、彼

の醫博士は遮りぬ。

「一時後れては、取返しがりません。一體、あなた方は病を輕蔑して居らるゝから埒あかん。感情をとやかくいふのは姑息です。看護婦一寸お押へ申せ。」

いと巖なる命の下に五名の看護婦はバラ／＼と夫人を圍みて、其手と足を押へむとせり。渠等は服従を以て責任とす。單に、醫師の命をだに擧ずれば可し、敢て他の感情を顧ることを要せざるなり。

「綾！ 来ておくれ。あれ！」

と夫人は絶入る呼吸にて、腰元を呼び給へば、慌てゝ看護婦を遮りて、

「まあ、一寸待つて下さい。夫人、何うぞ、御堪忍遊ばして。」と優しき腰元はおろ／＼聲。

夫人の面は蒼然として、

「何うしても肯きませんか。それぢや全快つても死んでしまひます。可いから此儘で手術をなさいと申すのに。」

と眞白く細き手を動かし、辛うじて衣紋を少し寛

げつゝ、玉の如き胸部を顯し、

「さ、殺されても痛かかない。ちつとも動きやしないから、大丈夫だよ。切つても可い。」

決然として言放てる、辭色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威嚴あたりを拂ふにぞ、満堂齊しく聲を呑み、高き咳をも漏らさずして、寂然たりし其瞬間、先刻より些との身動きだもせで、死灰の如く、見えたる高峰、軽く身を起して椅子を離れ、

「看護婦、刀を。」

「えゝ。」

と看護婦の一人は、目を二りて猶豫へり。一同齊しく愕然として、醫學士の面を瞻る時、他の一人の看護婦は少しく震へながら、消毒したる刀を取りてこれを高峰に渡したり。

醫學士は取ると其まゝ、靴音軽く歩を移して、衝と手術臺に近接せり。

看護婦はおど／＼しながら、

「先生、このまゝでいゝんですか。」

「あゝ、可いだらう。」

「ぢやあ、お押へ申しませう。」醫學士は一寸手を舉げて、軽く押留め、

「なに、それにも及ぶまい。」

謂ふ時疾く其手は既に病者の胸を搔開けたり。

夫人は兩手を肩に組みて身動きだもせず。

恚りし時醫學士は、誓ふが如く、深重嚴肅なる音を

調もて、

「夫人、賣任を負つて手術します。」

時に高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「何うぞ。」

と一言答へたる、夫人が蒼白なる兩の頬に掃ける

が如き紅を潮しつ。ぢつと高峰を見詰めたるまゝ、

胸に臨める鋭刀にも眼を塞がむとはなさざりき。

唯見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、

さと白衣を染むるとゝもに、夫人の顔は舊の如く、

いと蒼白くなりけるが、果せるかな自若として、足

の措をも動かさざりき。

ことのこゝに及べるまで、翳學士の舉動脱兎の如く神速にして聊か間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同は素より彼の醫博士に到るまで、言を挟むいベき寸隙とてもなかりしなるが、こゝに於てか、わななくあり、面を蔽ふあり、背向になるあり、或は首を低るゝあり、予の如き、我を忘れて、殆ど心臓まで寒くなりぬ。

三秒にして渠が手術は、八ヤ其佳境に進みつゝ、刀骨に達すと覺しき時、

「あ。」と深刻なる聲を絞りにて、二十日以來寢返りさへも得せずと聞きたる、夫人は俄然器械の如く、其半身を跳起いぎつゝ、刀取れる高峰が右手の腕に兩手を確と取継りぬ。

「痛みますか。」

「否、貴下だから、貴下だから。」

恚言懸けて伯爵夫人は、がつくりと仰向きつゝ、凄冷極り無き最後の限に、國手をぢつと瞻りて、

「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」
謂ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、

乳ちの下した深くふか搔か切りきぬ。醫學士いがくしは眞ま蒼つさになりて戰をのきつゝ、

「忘れわすません。」

其その聲こゑ、其その呼い吸き、其その姿すがた、其その聲こゑ、其その呼い吸き、其その姿すがた。伯爵はくしやく夫人ふじんは嬉うれしげに、いとあどけなき微ゑ笑みをふ含みて高たか峰みねの手てより手てをはなし、ばつたり、枕まくらに伏ふすとぞ見みえし、唇くちびるの色いろ變かはりたり。

其その時ときの二ふた人たりが状さま、恰あたも二ふた人たりの身しん邊べんには、天てんなく、地ちなく、社しゃ會かいなく、全まく人ひとなきが如ごとくなりし。

數ふれば、はや九年前なり。高峰か其頃は未だ醫
 科大學に學生なりし砌なりき。一日予は渠ととも
 小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅の花盛
 なりし。渠ととも手に手を携へ、芳草の間を出つ、入
 りつ、園内の公園なる池を繞りて、咲揃ひたる藤を
 見つ。

歩を轉じて彼處なる躑躅の丘に上らむとて、池に
 添ひつゝ歩める時、彼方より來りたる、一群の觀客
 あり。

一個洋服の扮装にて煙突帽を戴きたる蓄髯の漢前
 衛して、中に三人の婦人を圍みて、後よりもまた同
 一様なる漢來れり。渠等は貴族の御者なりし。中な
 る三人の婦人等は、一様に深張の涼傘を措毆羽して、
 据捌の音最冴かに、する／＼と練來れる、ト行違ひ
 ざま高峰は、思はず後を見返りたり。

「見たか。」

高峰は頷きぬ。「むゝ。」
恁て丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されど唯赤かりしのみ。

傍のベンチに腰懸けたる、商人體の壮者あり。

「吉さん、今日は好いことをしたぜなあ。」

「さうさね、偶にやお前の謂ふことを聞くも可いかな、淺草へ行つて此處へ來なかつたらうもんなら、拜まれるんぢやなかつたつけ。」

「何しろ、三人とも揃つてらあ、どれが桃やら櫻やらだ。」

「一人は丸髻ぢやあないか。」

「何の道はや御相談になるんぢやなし、丸髻でも、束髪でも、乃至しやぐまでも何でも可い。」

「ところで、あの風ぢやあ、是非、高島田と來る處を、銀杏と出たなあ何ういふ氣だらう。」

「銀杏、合點がいかぬかい。」

「えゝ、わりい洒落だ。」

「何でも、貴姑方がお忍びで、目立たぬやうにといふ肚だ。ね、それ、眞中のに水際が立つてたらう。」

いま一人が影武者といふのだ。」

「そこでお召物は何と踏んだ。」

「藤色と踏んだよ。」

「え、藤色とばかりぢや、本讃が納まらねえぜ。」

足下のやうでもないぢやないか。」

「眩つてうなだれたね、おのづと天窓が上らなかつた。」

「そこで帯から下へ目をつけたらう。」

「馬鹿をいはつし、勿體ない。見しやそれとも分かぬ間だつたよ。あゝ殘惜い。」

「あのまた、歩行振といつたらなかつたよ。唯もう、すうツとかう霞に乗つて行くやうだつて。裾捌、褌はづれなんといふことを、なるほど見たは今日が最初てよ。何うもお育柄はまた格別達つたものだ。」

「ありやもう自然、天然と雲上になつたんだな。何うして下界の奴濟が眞似ようたつて出来るものか。」

「酷くいふな。」

「ほんのこツたが私やそれ御存じの通り、北廓を三年が間、金毘羅様に斷つたといふもんだ。處が、

何なんのこたあない。肌守はだまもりを懸かけて、夜中よなかに土堤どてを通とほらうぢやあないか。罰ばしのあたらないのが不思議ふしぎさね。もう／＼今日けふといふ今日けふは發心ほつしん切きつた。あの醜婦すべつたども何どうするものか。見みなさい、アレ／＼ちらほらとかう其處そこいらに、赤あかいものがちらつくが、何どうだ。まるでそら、芥塵こみか、蛆うじが蠹うごめいて居ゐるやうに見みえるぢやあないか。馬鹿ばか々々しい。」

「これはきびしいね。」

「串戲じよつたんぢやあない。」

あれ見みな、やつぱりそれ、手てがあつて、足あしで立たつて、着物きものも羽絨はおりもぞろりとお召めしで、おんなじ様なやうな蝙蝠かう傘もりがさで立たつてる處ところは、憚はやりながらこれ人間にんげんの女をんなだ、然しかも女をんなの新造しんぞだ。女をんなの新造しんぞに違ちがひはないが、今いま拜まがんだのと較くらべて、何どうだい。まるでもつて、くすぶつて、何なんといつて可いいか汚よごれ切きつて居ゐらあ。あれでもおんなじ女をんなだつさ、へむ、問きいて呆あきれらい。」

「おや／＼、何どうした大變たいへんなことを謂い出したぜ。」

しかし全まくだよ。私わつしもさ、今いままではかう、ちよいとした女をんなを見みると、ついそのなんだ。一いっしよ所に歩あるくお前めえ

にも、随分迷惑を懸けたつけが、今を見てからも
う／＼胸がすつきりした。何だかせい／＼とする、
以來女はふつゝりだ。」

「それぢやあ生涯ありつけまいぜ。源吉とやら、
みづからは、とあの姫様が、言ひさうもないから
ね。」

「罰があたりあ、あてこともない。」

「でも、あなたやあ、と來たら何うする。」

「正直な處、私は遁げるよ。」

「足下もか。」

「え、君は。」

「私も遁げるよ。」

と目を合せつ。しばらく言途絶えたり。

「高峰、ちつと歩かうか。」

予は高峰と共に立上りて、遠く彼の壯伎を離れし
時、高峰はさも感じたる面色にて、

「あゝ、眞の美の人を動かすことあの通りさ、君
はお手のものだ、勉強し給へ。」

予は畫師たるが故に動かされぬ。行くこと數百歩、

彼の樟の大樹の鬱蒼たる木の下蔭の、稍溥暗きあたりを行く藤色の衣の端を遠くよりちらとぞ見たる。

園を出れば丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨硝子入りたる馬車に、三個の馬丁休らひたりき。其後九年を経て病院の彼のことありしまで、高峰は彼の婦人のことにつきて、予にすら一言をも語らざりしかど、年齢に於ても、地位に於ても、高峰は室あらずるべからざる身なるにも開らず、家を納むる夫人なく、然も渠は學生たりし時代より品行一層謹厳にてありしなり。予は多くを謂はざるべし。

青山の墓地と、谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相逝けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

【完】